花譜SS

日々末吉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不可解の感動が溢れてどうしようもなくて妄想垂れ流しＳＳを投稿しました。

目　次

花譜ＳＳ

観光で訪れた街、
歩道橋で一人の少女とすれ違った。
可愛らしい、と安易に形容して良いのか分からない不思議なフードを被った少女だった。
独特な雰囲気が気になってしまい、私はつい振り返ってしまった。
声でもかけるというのか。
私はバカだなと、自嘲した。
少女はいなかった。
大きな青い影が伸びて消えていった気がした。飛行機でも通ったのだろう。
「ははっ、きっと疲れてるんだな」
さっき見た光景は幻だった。
そう言われた方がしっくりくる。
私は何も見なかった。
それで終いだ。私はいつのまにか止まっていた足を動かし歩き出した。

日が暮れてからも私はあの不思議な出来事を忘れられずにいた。
そうして気が付けば、あてもなく夜の街を歩いていた。
まるで誘蛾灯につられる羽虫のようだ。夜の街の灯りに誘われたならば救いもあっただろう。私が誘われてしまったのは砂漠のオアシスだ。それもただの蜃気楼できっと目指した場所には何も見つからない。
後悔だけが残るのだ。
「帰ろう」
私は諦めることにした。
どうせ変わらない。いつもの日常に戻るべきだ。

そう思い、引き返したはずがどうも道を間違えたようだ。通りを間違えたのか方角を間違えたのか、私は覚えのない場所へやってきていた。

薄暗い小さな公園で、子供が一人ブランコに座っていた。小さく揺れてぎいぎいと音がする。

――こんな遅くに子供が一人じゃ危ないよ

そんな声をかけようとしたのだと思う。

だが、声はかけられなかった。

子供があのフードの少女だったから？

それもあるかもしれない。

だが、

私が声をかけられなかったのは少女が歌っていたからだ。

とても綺麗な音だった。

それがあんまりに綺麗で、私は声をかけることも忘れて聞き惚れてしまった。

歌が終わると拍手をしていた。

少女は今気付いたようで驚いてこちらを見ていた。

そうだ、帰るように言わなければ。

「もう一曲聴かせてくれませんか？」

「……とっても素敵な曲で、興奮して眠れなくなっちゃって、はい。すごい、良い曲です。」

帰るように促す筈がアンコールをしてしまった。

少女は輝く瞳で歌を語った。歌を歌ってくれた。

少女の世界に引き込まれてしまいそうな力強く不思議な歌だった。

とても素晴らしい歌だった。

私は拍手もできず歌の余韻に浸っていた。

とんとん、と肩を叩かれて振り向くと警察がいた。

「飲み会帰り？こんなところで一人でぼうっとしてると危ないから帰りなよ。」

「いや、一人？は？」

ブランコに少女はいなかった。

蜃気楼は時間が経つと消えてしまった。それともシンデレラの魔法が解けたのだろうか。

「ふふっ、ありがとうございました。」

私は感謝の言葉を口にして宿へと帰った。

貴方に会えて良かった。

貴方を観測できて良かった。

帰り道、私はついつい道を間違えてしまった。素敵な共犯者には出会えなかった。